

密教集団と陰謀

橋爪大三郎 (社会学者)

オウム真理教の組織論に、犯罪への必然性はあるか？
オウムは仏教の正当な出家集団なのか？
その組織は、共産党などの革命集団とどこが違うのか？
オウム教団の教義と組織に則しつつ、陰謀と犯罪への道程を考える。

出家主義の仏教教団であるはずのオウム真理教が、地下鉄サリン事件をはじめとする一連の疑惑の渦中にある。真相はいずれ裁判のなかで明らかになるとしても、はたして仏教徒である彼らに、そうした事件を引き起こさなければならぬどのような動機や必然性があつたのだろうか？

このうち、動機の面については、別に考察した「オウム真理教はなぜ最終戦争を確信したか」『月刊RONZA』(六月号)。本稿は、教団の組織原則に照らして、一連の疑

は日本に現われるべくして現われた教団だったのであり、だからこそその後順調な拡大をとげたのだった。

しかし、麻原彰晃氏が導師(グル)として、教団の頂点に立ったことは、この教団が仏教教団としてどこまで正統なのかについて、議論の余地を生じさせた。

仏教徒であるかどうかの分岐点は、三皈依(仏・法・僧の三宝への皈依)を唱えることである。このうち、仏陀への皈依は、釈尊への皈依を意味する。そして、法への皈依は、具体的には、釈尊の説いた經典の權威を承認することを意味する。さらに、僧(サンガ)への皈依とは、釈尊が創設したサンガを尊敬し、その修行法(戒本Ⅱ『波羅提木叉』の定める戒)を尊重することを意味する。正統な仏教の修行者は、最初期の仏弟子たちから途切れることなく受け継がれた戒を授けられなければならない(戒は学位のようなもので、自分で自分に授けることができないのだ)。正式な授戒の手続きを経ることが、仏教徒であるための必要十分

惑が彼らによって必然的に引き起こされたと考えるかどうかを考えてみよう。

現われるべくして現われた教団

オウム真理教の出発点は、麻原彰晃氏が「日本で唯一の最終解脱者」としてヒマラヤから帰国し、彼の修行法に従うならば誰でもすみやかに解脱できる(超能力も得られる)と宣言したことだった。

このことは、二つの意味を持っている。

条件なのである。大乘仏教の成立以降に東伝して、中国や日本に展開した仏教は、この点(戒の正統性)で疑問の余地こそあつたが、この原則に正面から異が唱えられたことは一度もなかった。

オウム真理教の教えは、仏教の經典(特に、阿含宗と同じく、南伝パーリ語の經典)に依拠する。その意味で、仏教思想にもとづく教団ではある。しかし、彼ら出家修行者の集団が、仏教の伝統的な組織原則から考えて、正統なサンガであるとは考えられない。以下それを検証していこう。

釈尊か、導師か

すべての仏教經典は、釈尊がこの上なく高い解脱(無上正等覚)を得たことを前提として書かれている。この点をゆるがせるなら、そもそも仏教が成立しなくなる。

それでは、麻原彰晃氏の到達したとされる最終解脱と、釈尊の解脱とはどのような関係になっているのだろうか。

ひとつはこの宣言が、既存の仏教界に対する痛烈な批判になっていたこと。既成の仏教は、仏教徒の本来の務めである修行(それも、解脱をめざす真剣な修行)をそっちのけにし、人々の悩みにも、時代の課題にも、教理の研鑽にも背を向け続けてきた。もうひとつは、八〇年代に入ってオカルトや超能力や神秘思想などをこたまぜにしたサブカルチャーに魅きつけられた無数の若者の、渴望にも似た感覚に応えるものであつたこと。——この二つの意味で、オウム真理教

釈尊の解脱と麻原氏の解脱なら、麻原氏を導師(グル)と仰ぐ理由を、説明しなければならなくなる。仏教の原則から言って、釈尊の修行法よりも麻原氏の修行法を重視するいわれはないからだ。いっぽう、麻原氏の解脱と釈尊の解脱なら、オウム教団が仏教を名乗る理由がわからなくなる。釈尊の權威や仏教經典を借りずとも、麻原氏の權威に従えばよいはずだからだ。どちらにしても、矛盾が生ずる。

それかあらぬか、青山の教団東京総本部で私が取材したオウムの出家者らは、麻原氏の至った解脱の境地は釈尊と同等のものだと答えた。論理的に考えて、それ以外にはない(ただし、グルへ師へなしてその境地に至ったという点では、釈尊のほうが麻原氏より一段階上であるという)。

修行上の指導者を仏陀と同等のものとして皈依するのは、やはり出家修行者であつた日蓮を仏陀と仰ぐ日蓮正宗とよく似た構造になっている。

それでは、このこと(釈尊の覚りⅡ麻原氏

の覚り)はいかに証明されるのか? 同じく出家者らの説明によると、麻原氏はインドの高位の聖者らに会い、自分の宗教体験について述べたところ、彼らは、それは仏教経典にいう仏陀の覚りそのものであると判定したという。これでは証明になっていない(Qなぜか? 論証は読者にまかせ)が、先に進もう。

出家修行と戒

次に重要なポイントは、麻原氏を師と仰ぐ出家修行者の集団は、どのような戒に従っているのかということだ。

出家者の修行は一般に、戒(修行のための規則)にきわめて忠実である。なぜならば、戒は、煩惱を滅尽し解脱へと向かうための行為のガイドラインとなるからだ。その点は、オウム真理教の場合も同じだ。したがって、オウム真理教団の戒がどのようなものかわかれば、彼らの行動をかなり正確に理解し、予測できると期待できる。

仏教の出家集団(サンガ)の場合、戒が決定的に重要である。

仏教徒は、在家/出家に大別できる。在家者には、五戒(殺生戒、偷盜戒、邪淫戒、妄語戒、飲酒戒)が授けられる。これらは、日常生活を送るための指針で、違反したからといって罰則があるわけではないが、なるべくそれに従って行動すべきであると思われる。いっぽう出家者(サンガの比丘)には、具足戒が授けられる。戒の条項はきわめて数が多く具体的で、比丘は二百五十戒、比丘尼は三百四十八戒にもなる。釈尊を師として出家修行をするとは、要するにこれらの戒を守った修行スタイルをとるということなのである。戒を授けると、修行者には戒体(目に見えないパワー)がそなわって、修行がはかどると考えられている。具足戒やサンガの運営方法は、仏典のなかの律蔵に収められている。これらの規則は釈尊がじきじきに制定したもので、弟子たちは勝手に変更できない。大乘教団はこうした修行法を「小乗」とあざけて、戒

律を守ることをやめてしまったが、南伝したスリランカやタイの仏教は、今日でもこの戒を厳格に守っている。

仏教の組織原則であるサンガの運営方法は、仏教の精神を理解するために重要なのに、わが国ではほとんど知られていない。もう少し詳しくみてみよう。

出家した比丘たちは、まったく対等かつ自由な修行者で、ふだんは自由に遊行しつつ乞食生活を送っている。彼らのあいだにはいかなる固定した上下関係も、常設機関もない。彼らを縛るものといえば、釈尊の定めた戒律のみ。サンガは自治体で、エリアごとに定期的に全体集会(羯磨)を開く。そして、全員一致でものごとを決める。すべては自発的に行なわれ、一切の強制や命令はない。なぜなら、仏教の修行は自発的でなければ意味がなく、ほかから強制された行為はなんの功德にもならないからである。

サンガの戒律違反にも、この原則はあてはまる。戒に違反した比丘は、集会の場

自発的にその事実を申し出、定められたやり方に従って自分で自分を罰する。ほかの比丘はそれに立ち会うにすぎない。もっとも重い罪でも、サンガを追放になるだけであって、それ以上の刑罰を課せられるわけではない。

いっぽう大乘教は、もともと在家者の運動として出発したが、時代が下るに従って

小乗のサンガと混在し、大小兼学がふつうのかたちになった。

中国に伝わったのは、比較的初期の大乘教だったが、それでも出家を原則とした。では彼らは、どんな戒に従うのか。大乘戒に従うと主張するのだが、それは名ばかり。そもそも大乘には、独立した律蔵(戒本)がない。大乘戒は大乘経典のなかに書いてあ



オウムは仏教教団か?

オウム真理教は、どこまで仏教教団なのだろうか?

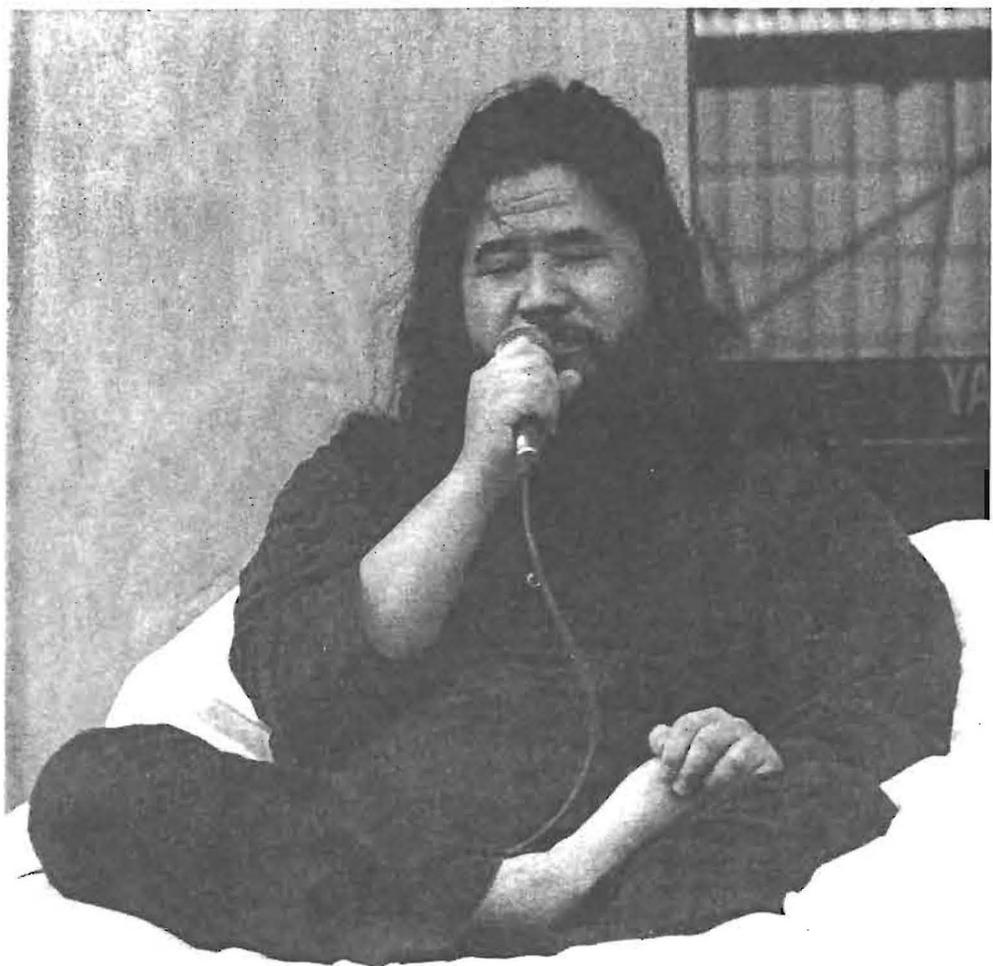
オウム真理教の場合、修行は、小乗(ニカヤーナ)→大乘(マハーヤーナ)→金剛乘(ヴァジラヤーナ)の順に進んでいくことになっている。それなら、戒律もそれに対応して、小乗戒→大乘戒→金剛乘戒を用意しているのだろうか?

私はオウム教団の戒本を入手したいと思
ったが、東京総本部で外報部(現広報部)の
担当者に見つかったところ、そんなものはない
と言われた。戒は戒本として成文化されて
(印刷されて)おらず、出家修行者に即し
て、内部通達として伝達されているらしい。
具体的には、心・口・意の十戒をベースに、
それを具体例にあてはめたさまざまな戒が
ある。成文化されていなくても、各支部の
古参リーダーが今までの通達や具体例をお
ぼえていて、それを新人に伝えていたので
問題がない、という話だった。戒律違反を
処理するための、出家者の集会(小乗戒に
いって)のようなものも、定期的に開かれて
いるわけではないようだ。

このことは、重要な問題を含んでいる。
このシステムでは修行者は、自分が戒律に
違反したかどうかを、上位の修行者に教え
てもらって知ることができない。また、
戒律違反が生じた場合にどう解決すればい
いかも、上部の指示を仰ぐことになる。こ
れを極端におし進めれば、上位の修行者は

任意に自分が管轄する修行者の「戒律違反」
を発見でき、懲罰を命ずるというやり方に
なっても不思議はない(捜査当局は、数十人
の「反抗的な」信者が戒律違反を理由に、教
団幹部の懲罰を受けたとみている)。自分の
修行を自分でコントロールし、戒律違反を
自分の手で解決するという仏教の出家修行
の原則とは、正反対である。

オウム教団の戒律は、麻原氏が古参リー
ダーを指導し、古参リーダーが各支部の修
行者を指導するという上意下達のやり方で、
教団のピラミッド組織を通じて出家者全体
に供給されている、と考えられる。それは
戒律というよりも、教団組織の規律(もつと
いえば、麻原氏の命令)と変わらない。教団
組織にプラスになることが戒律であり、そ
れを実行することが修行であるという具合
に、出家修行のあり方がどこまでも教団の
組織目的に吸い寄せられていく構造がある。
オウム教団の場合、戒が明確でないという
点において、出家者の行動が自律的であり
えないのだ。



産を半ば強制的に教団に布施させられると
いうのだから、仏教の原則を逸脱している。

仏教の出家者もたしかに、わずかな什器と
衣服を除いて財産を持たないのであるが、

反社会的自転車操業

それでは、オウム教団の出家者とは、い
ったい何なのか?

オウムの出家者は、①家族と連絡を断つ、
②財産をすべて教団に贈与(布施)する、こ
とになっている。この点をめぐって、多く
のトラブルが発生した。

①は、キリストの教え「息子を父に、娘
を母に、嫁をしゅうとめに、反抗させるた
めに私は来た」を連想させるし、②は、仏
教の布施のことではないかという感じがす
る。そこでなんとなく、宗教一般にありが
ちな社会との摩擦と思われるが、よく
考えてみると、そこには見過ごすことの
できない反社会性が隠れている。

布施について考えてみると、出家集団に
対する布施(財物の贈与)は本来、在家信者
の行為である。在家信者が自発的に布施す
るからこそ、彼の功德になる。オウムの場
合、出家しようとする信者が、彼個人の財

それはもとの財産を実家に置いてくるから
だ。そうしないと残された家族が生活に困
ることになる。仏教は、在家者の家族を重
視するし、キリスト教にはそもそも出家の
考え方がないから、家族と連絡を断つとい
うやり方も、正統宗教から大きくずれてい
る。

戒律を持たないオウムは、出家を、①、
②のように特徴づけた。ということは、オ
ウム教団は、在家(世俗社会)と円満な関係
を築くことを初めから断念している、とい
う意味になる。仏教の出家集団(サンガ)
は、日々の食事を在家の人々に仰ぐことか
ら明らかなように、在家との円満な互恵
的關係(出家は在家に戒を授け説法をし、在
家は出家に日々の布施をする)に支えられて
いる。それを否定するのが、出家主義のオ
ウム教団の独特な点である。出家に際して
財産一切を教団に寄贈させ、親兄弟の財産
も狙うとなれば、人々が警戒心を持つのは
当然だ。オウム教団の出家は、いわば世俗
社会から、人間(信者)も財産も奪い取って

くるところに成り立っている。

こうした変則的な出家のあり方のため、二つのことが必然的に帰結する。

第一にオウム教団は、信者を、世俗社会と異なるリアリティによって、強力に支配する必要が生じる。世俗社会には世俗社会のリアリティがあるわけだが、それに巻き込まれていたのでは、出家して全財産を布施するという選択はできない。世俗社会を上回る強烈なリアリティに信者を巻き込み、信者の精神世界を支配する必要がある。それには、信者の修行が進むのをじっくり待つわけにはいかない。修行の段階を進めるイニシエーションに薬物を用いるのを、ためらわなかったのはそのためだ。

第二にオウム教団は、不断に組織を拡大し続け(新しい出家者を次々と見つける)ないと維持できない。出家者が出家すると、その布施で教団は一時的に潤うが、そのあとは逆に、彼の生活の面倒をみなければならず、経済的に重荷になる。それを新しい出家者で埋め合わせるという、ネズミ講と

そっくりのメカニズムが、オウム教団に内蔵されている。この自転車操業の構造を、とりあえずうまく回転させたのが、ハルマゲドン予言だったのではないか。

仏教の出家集団が、終末予言(一神教の流れを汲む)によって教勢の拡大を図るなんて、木に竹を接いだような感じがする。教理の面でそこはどういう脈絡をつけてあるのかを別稿で述べた(「オウム真理教はなぜ最終戦争を確信したか」)。同じ問題を組織の面で見ると、彼らの出家の観念が特異であることに帰着する。

ワークと修行

出家主義教団としてのオウム真理教の特徴を、もう少し考えてみよう。

出家者は、家族と連絡を断つ。要するに、教団の与えるリアリティ、教団内で得られる人間関係を唯一至上のものとして選択させられるのである。また、全財産を布施する。要するに、経済的にも教団に依存しな

がら生きていく以外になくなる(正統仏教の修行者たちは、サンガに依存せず、在家者に依存して生きていけばよかった。サンガは、布施された土地や家屋など固定資産を所有している場合もあったが、日々の糧は在家の布施に頼っていた)。

こうして、教団に全面的に依存するしかなくなったオウムの出家者を待っているのが、ワークである。ワークこそ、出家しないといけない修行の方法なのだ。座禅やその他の修行なら、在家のままでもできるかもしれないが、教団のためにフルタイムで奉仕しようとするれば、それは無理である。パソコンの製造や販売、ラーメン・カレーの飲食店、車の運転、病院での医療活動、薬品の製造……どこからみても、世俗

の活動(いわゆる労働)だ。これを修行として行なう。既存の宗教で、これによく似たやり方を探せば、修道院カイエズス会。あるいは、禅宗だろうか。

オウム真理教は、自給自足を掲げている。ハルマゲドンで社会が徹底的に破壊された

の段階まで進んだかを、誰がどうやって判断するのか? この質問に、私がインタビューした出家修行者は口を揃えて、「それは麻原尊師がすべて決めます」と教えてくれた。麻原氏は修行者一人ひとりの修行のう

えでの悩みや努力を知っていて、適切なタイミングで修行の段階を先へ進めてくれるのだという。留置所に入れられたあとでも判断ができるのかと意地悪に聞いてみたが、大丈夫ですという返事だった。

千人を越す出家者全員の修行の進み具合を、麻原氏一人がつぶさに把握できるのか疑問だが、そう信じられていることが重要である。誰がどれだけの修行段階に達したかという修行のヒエラルキーは、麻原教団が完全に掌握している。ということは、教団組織全体も間接的にコントロールできる、ということである。何が教団のために必要な活動で、誰がそのために行動すべきか(組織編成と人員配置)を、麻原教祖(だけ)が決定できる立場にある。なぜならそれらは、すべて修行に関することだからだ。

修行のヒエラルキーによって決まっていることだろう。

あと、自分たちだけが生き残るというのだから、筋は通っている。自給自足を掲げる以上、労働が義務となる。在家信者や国家財政に負担をかけないように考えた禅宗は、出家者の労働を禁止していた従来の戒律をかなり捨て、労働こそ修行であると

あるというが、麻原教祖の下・数段は空きとなっており、正大師、正悟師が今のところ最高ランクであるという。彼ら修行の進んだ幹部たちが、(たとえば正大師の上祐史浩氏が外報部長、という具合に)教団組織を統轄するポジションにつく(編集部註…その後、六月二十一日の記者会見において教団側は機構改革を発表。宗教的な指導を行なう者と組織の実務運営者とを明確に分離する方針を打ち出した)。階級と職務が対応している点は、軍隊に似ているかもしれない。

この質問に、出家者たちは、①上から指示がある、②ただし自分の希望も尊重される、と教えてくれた。なんのことはない、一般企業とまったく同じである。

もしも、一般企業と異なる点があるとしたら、組織の階層秩序(ヒエラルキー)が、

共産党とオウム教団

オウム教団の組織は、一般の企業組織(官僚組織)とみかけは似ているが、一人ひとりがそれを修行として行っている点が、根本的に異なる。このためオウムの組織は、いわゆる近代的な官僚組織と違った動き方をする。

近代の官僚組織は、一人ひとりが職務に忠実であることが基本である。権限と責任の原則、文書主義、手続き主義、形式合理性……。要するに、法律や規則に従いつつ、個人の感情や意見をさし挟まないで、職務をこなすことが求められる。そして、めいめいがこなすべき職務の内容は、組織の設置目的や職務分担によってあらかじめ決まっている(上司が勝手に変更することはできない)。

レーニンの時代、共産党は非合法の秘密組織だったが、こうした近代の官僚組織のひとつであることに違いなかった。その目

的は、革命を実現すること。それに必要な職務分担でもって、組織ができて上がっている。「職務への忠誠」の観念が基本にある。レーニンが死のうと、上部が逮捕されようと、共産党員としてのアイデンティティはゆるがさない。こうした観念があれば、秘密の任務を実行する場合にも、共産党のなかのある部隊(縦割りの官僚組織)でもって担当できる。「職務への忠誠」は、およそ近代の官僚組織にとって不可欠の観念なのだ。

オウム教団の場合、一人ひとりの行動の根底にあるのは、修行へのモラル(修行をやるぞ、という気持)である。そのモラルがあるところへ、麻原教祖から「これがお前のワークだ」と言われて初めて、職務とのつながりが生じてくるにすぎない。言い換えるなら、「職務への忠誠」よりも、「麻原教祖への信頼」のほうが優先する。教団の医師や科学者や弁護士が、専門的な「職務への忠誠」よりも、「麻原教祖への信頼」や教団の組織目標を優先させてしまった理由

は、ここにある。こうした構造は、教団の強みであると同時に、弱点にもなっている。

(その昔の)共産党は、革命をめざす非合法な組織で、共産党員になることは、既存の資本主義社会と全面的な対決・闘争の関係に入ることを意味した。どんな下っ端の党員であっても、階級闘争に一生を捧げる覚悟ができていた。それであれば、「これは党の命令だ」と本人に告げれば、どんな任務にもつかせることができる。つまり、秘密の任務を持った部隊を、党組織のなかに縦割りで作れるわけである。まともな近代の官僚組織であれば、こういうことが可能でなければならぬ。

ところが、オウム教団の場合、秘密の任務(シークレット・ワーク)を、そのように組織することはできなかった。

事件は現在、ひき続き捜査中であり、真相は法廷で明らかにされるしかない。警察・検察の非公式の発表しか材料のないいわれが、オウムの一連の疑惑を事実であ



るかのように断定してしまうことは危険だ。ここで考えたいのは、地下鉄サリン事件をはじめとする一連の容疑事実が、報道されているように教団幹部を実行犯に巻き込んでいるとすると、それは教団の組織原則からいって十分に説明のつくことなのか、ということである。

オウム教団は、出家修行者の集団である。そのメンバーは、出家する時点で、修行を続ける(そして、何かのワークをする)覚悟まではしたかもしれないが、日本の法律は無視しますとか、サリンを喜んでばら撒きますとか覚悟を決めたわけではない。つまり、オウムの出家修行者は共産党員と違い、単に指令しただけでは、秘密の任務をこなす兵隊として使えないものにならないのである。

それでは、どうするか。教団には、修行の階段がある。小乗→大乘→金剛乗と修行の段階が進むに従って、それまで知ることのできなかつた知識が次々と開け、麻原教祖との距離がますます縮まり、教団の目的がいよいよはつきり理解できるようになる。

修行の進んだ人間ほど、社会常識からかけ離れた任務を任せるのに適当であることになる。

密教の末期にインドで現われたタントリズムに、殺生・偷盗・妄語・姦淫など、小乗の戒律が禁じている行為をわざと実行するという修行法があった。殺生(「ポアする」こと!)が修行になるとは物騒な話だが、修行の段階が上がったことを証明するために、低い修行の段階では禁じられていることを実行するというのは、密教の論理にも通じる。したがって、こうした秘密の任務は、高位の修行者に集中せざるをえない。また、次々と秘密の任務を考え出していかないと、高位の修行者に次の修行のステップを提示することもできないのである。

尊師の権威はどこからくるか?

地下鉄サリン事件の実行犯グループは、治療省トップの林郁夫医師をはじめ、教団幹部がずらりと加わっているというので注

目を集めた。松本サリン事件の際も、科学技術省長官の故村井秀夫氏のみならず、サリンを噴霧したという。こうした容疑が事実であるとすれば、それは、出家修行者の集団であるというオウム教団の組織原則から必然的に導かれることである。

しかもこれらは、すべて教祖麻原氏の指示と承認による、と考えなければならぬ。なぜなら、修行の階梯を設定し、誰がどの段階に達しているかを判断し、秘密の任務を考え出し、修行者たちにそのワークを割り振るのは、麻原氏の宗教的権威がなければできないからである。麻原氏の知らないところで行なわれたなら、それは修行としての意味を持たなくなるのだ。

それでは、麻原氏のそうした権威は、仏教のロジックでもって根拠づけられるものなのか? 私は疑問に思う。

オウム真理教の出発点は、南伝パーリ語仏典だった。麻原氏の著作のいくつかも、そうした仏典の解釈である。オウム教団が仏教を名乗るなら、その解釈の正しさを主

張できなければならない。世間の評判では、オウム教団は熱心にパーリ語仏典を研究していて感心だということになっている。青山の東京総本部で私を案内してくれた外報部(現広報部)の担当者は、オウムではパーリ語の辞書も出版していると教えてくれたので、私は興味を持って、どういう研究者が監修しているのか実物をみたいと思つて頼むと、要領を得ない。よく聞いてみると、スリランカで出版されている辞書の、リプリントを日本で出版しただけのことらしい。

いったいオウム教団に、パーリ語や仏教学に通じた学者・研究者が何人いるのか? 教団から出版されているパーリ語経典の翻訳はどうやって進めているのか? わからない部分は、麻原氏の宗教的インスピレーションにもとづいて意味を決定するのだという話も聞いた。これでは、まさに超訳である。ちなみに、麻原氏にどれぐらいパーリ語の知識があるのかは、うっかり聞きそびれた。

世紀末ニッポンの「ハーメルンの笛吹き男」 麻原彰晃はなぜ「魅力的」なのか?

マスメディアはこそって麻原教祖の「俗物ぶり」を報じるが、誰も、多くの信徒たちがなぜ彼に魅せられたのか説明していない。平成の「ハーメルンの笛吹き男」の秘密はどこにあるのか?

小山田進一(精神科医)

オウム教団の事件を伝える報道を見ていて思い至った。教祖麻原はどこかハーメルンの笛吹き男に似たところがある、と。

「ハーメルンの笛吹き男」の物語では、ドイツの田舎町に現われた笛吹きが、町の人びとに裏切られたことへの復讐として、怪しげな笛の音によって、子供たちを山の奥へと連れ去ってしまう。教祖麻原も怪しげな笛を吹いて、少なからずの真面目な若者たちを上九一色村へと連れ去った。彼の吹く笛の音には何らかの魔力があったのかもしれない。あるいは、何かがその笛に魔力を与えてしまったのかもしれない。

オウム教団の事件を伝える報道を見ていて思い至った。教祖麻原はどこかハーメルンの笛吹き男に似たところがある、と。だがおそらくは、些細な動機しかないのに入信するところ、事の本质が潜んでいる。ある日突然崖が崩れるのは、それまでに見えざる亀裂が少しずつ広がっていたからである。ある日火山が噴火するにしても、それまでに地中でマグマの巨大な圧力が高まっていたはずである。通常、事のきっかけは些細なことの方が多し。それこそ、ほんの笛の音程度の。すなわち、少なからぬ若者たち

の心の中に、すでに何らかの変化を望むものがあつたにちがいない。それが何であるかを考察してもよいような気がするのだ。

破壊衝動に共鳴する 笛の音

日本社会は閉塞していると人びとは感じはじめている。小さな島国であるが、昭和の初め六千万人だった人口は(百年前は三千万人)、戦争をはさみながらも昭和の終わりに二倍に増えた。一億二千万人という数字はかなり巨大なものであり、それによって構成される社会の単位も巨大化している。個々の人びとはその小さくなったのである。大昔よりずっと小さ

くなったのだ。自由の国なのだろうが、ふつうのサラリーマンが職を簡単に変えることは不可能である。自由な発言というのも、組織の人間がはたして行ない得るであろうか。

食い物だけはなぜか豊富にあるから、やたらに太るけれど、ニワトリみたいではないか。餌だけは吐き出したくなるほど食べさせられるが、オリからは出られず、せつせと卵を産ませられる。産めなくなると、挽き肉にされてしまう。誰も自由など実感していない。バブルの崩壊のあとさらさらじわじわとした締めつけがある。つまり考えれば、バブルの崩壊の前だって皆くたびれていた。心のど